

## 希望（のぞみ）

# 社会的自立の基礎の力を育成する自己開発型教育の研究

—新領域「希望（のぞみ）」における単元「めざせ！カッコいい2年生」を通して—

鈴木昌二

## 1 はじめに

本年度、研究開発学校指定校である附属三原学校園において、新領域「希望（のぞみ）」<sup>1)</sup>の研究が始められた。この研究は、これまで行われてきた「キャリア教育」の課題を分析し、そして、本学校園の子どもの実態調査をもとにして、新しい領域を研究開発していくものである。そこで、本稿では、第2学年の実践をもとに、新領域「希望（のぞみ）」の有効性の検証を行っていく。

## 2 研究の方法

### (1) 対象児

広島大学附属三原小学校の第2学年 39名を対象とした。

### (2) 授業実施時期

平成24年4月から12月

### (3) 新領域「希望（のぞみ）」における育てたい子ども像とつけたい力及び価値観

#### 【育てたい子ども像】

様々な人々とともに、積極的に、粘り強く課題解決に取り組む中で、社会における有為な人となるべく自己の向上をはかる子ども。

「自らの能力を正しく認識し、それを社会のために生かし、またはそのことを期待されるような人」を目指して、自分をよりよく育てていく子ども、つまり「『自尊』と『共生』を向社会的にバランスさせること（＝社会的社会参画）」ができる子どもを育てたいと考える。新領域「希望（のぞみ）」において育てたい資質・能力とそれを支える価値観は、表1及び2である。

表1 「希望（のぞみ）」を支える中心的価値<sup>2)</sup>

小学校2年生
自分のしなければならないことを一生懸命するのは大事なことだ。（自律の重視 学びの尊重）

表2 つけたい力と価値観<sup>3)</sup>

（2年生の重点価値観）

資質・能力	価値観
人間関係形成・社会形成能力	規則・契約の尊重 公徳心
自己理解・自己管理能力	役割と責任の重視 節度・節制 自律の重視 自律・秩序・規律の重視 自主・自律の重視 自己の尊重 望ましい生活習慣の重視
課題対応能力	変革・革新の重視（知的な）関心の尊重

### (4) 検証の視点と方法

前述のつけたい力とそれを支える価値観を育むために、第2学年の授業実践の中で、以下の2つの活動を設定し、その有効性を学習の様子や事後アンケートによって検証していく。

- ①ナラティブ（物語論的）<sup>4)</sup>な自己開発的活動
- ②学校園内外のリソースを生かした「生き方」に関する体験的活動

## 3 実践「めざせ！カッコいい2年生」

### (1) 授業の構想

#### ①単元について

本単元はカッコいい2年生になるために、今、自分たちに必要なことは何かを考え、日常生活の中での目指すべき自分の姿として4つの行動目標を設定した。

- ・自ら大きな声で考えを話す
- ・自ら人の話を聞く

- ・自ら人のためにできることをする
- ・自らきまり（目標）を守る

この4つの行動目標の自己変容に視点を当てて「できる活動」と「見つめる活動」を交互に関係付けて行うことを単元の基本構造とした。「できる活動」とは、子どもが「できるようになりたい！」と熱中して取り組む活動を自己選択し、小集団で取り組む活動である。活動の計画・実践・振り返りを自分たちで創造していく自己開発的活動で、子どもにとっての活動目標はできるようになることである。一方、「見つめる活動」は、自己評価の時間となる。「できる活動」での自分をこの「見つめる活動」の時間に、行動目標に沿って自己評価することで、行動目標への意識を高めていくことができると考えた。また、単元の始めと終わりに4つの行動目標に関する自己評価アンケートを行い、その結果を個人のレーダーチャートにまとめていった。これが自己の成長の足跡となり、自分の変化を捉えるツールとなる。このように、他者と関わりながら自分を見つめ、なりたいたい自分へと自分を高めていく単元となるように構成した。

## ②目標

### ○ 人間関係形成・社会形成能力

- ・集団の目標や家庭の約束を自分から守る意識をもち、行動にうつそうとする。

### ○ 自己理解・自己管理能力

- ・「できる活動」での自分の役割を主体的に取り組んでいこうとする。
- ・行動目標を意識して日常生活を過ごしていこうとする。

### ○ 課題対応能力

- ・「見つめる活動」に置いて、自分の課題を明らかにし、何をすべきか見通しを持とうとする。

## ③単元計画

第1単元「はじめの一步」（全7時間）

第2単元「自ら歩む」（全14時間）

## (2) 授業の実際

単元のはじめに「希望（のぞみ）」の授業の説

明を行い、この授業を通してどんな自分になりたいかを問かけると、「カッコいい2年生になりたい」という意見が多く出た。そのため、それを目標として学びをスタートした。また、カッコいい2年生の姿を具体化していったところ、前述の4つの行動目標に絞られた。

次に、何を通して誰にその姿を見せていくのかを考えた。そして、幼稚園の年長からのペアさんである6年生にオリジナル劇を作り見せることを通して「自分たちの成長した姿と感謝の気持ちを伝えたい」という意見にまとまった。本単元は年間を通して取り組む学習であったため、まず、中間目標として9月に教育実習生に見せる（第1単元「はじめの一步」）、次に、最終目標として12月に6年生に見せる（第2単元「自ら歩む」）という2つの単元で構成するものとした。

### ①第1単元「はじめの一步」

教育実習生に見せる劇としてスイミーのオリジナル劇を小グループで作ることとした。まず、初めに発表までの見通しをもつために、活動計画をたてた。図1は、その活動計画である。

The image shows a handwritten activity plan on a grid. The title is 'はじめの一步' (First Step). It is organized into a table with columns for '日' (Date), '日' (Day), and '内容' (Content). The content includes planning for a play, writing a script, and practicing. The handwriting is in Japanese and includes details like '7月1日' (July 1st), '7月2日' (July 2nd), and '7月3日' (July 3rd). The plan involves writing a script for a play about a fish named 'スイミー' (Sui-mi) and practicing it with a partner.

図1 「はじめの一步」活動計画

実習生に「カッコいい姿を見せる」ことを目標に、登場人物の気持ちを考えながらセリフを考え、そのセリフを工夫していこうとする意欲がうかがい知れた。また、一人ひとりが自分の役割をもって取り組んでいこうとする姿も見られた。

本番までに3回の「できる活動」と3回の「見

つめる活動」を行った。「できる活動」では、スイミーの劇作りをグループで取り組み、活動終了後、グループでの反省を行った。以下は、「できる活動」後の子どもの反省である。

今日はみんなで意見をいっぱい言っていて、ちゃんとやっていた。途中からふざける人がいて、でも、その人は自分で切り替えて、また、意見を言っていました。自分で直せていいと思う。みんなで関わりながらできていたので、これからもよりよい自分になることを頑張ります。

いつもよりみんなが協力してくれて、とてもサポートしやすかったです。そして、セリフや振り付けを最初から最後まで覚えていました。本番では、実習生さんに「2年生カッコいいな」と言ってもらえる、いい劇にしたいと思います。みんなファイト！



図2 はじめの一步「できる活動」の様子

このように、「できる活動」を通して、友だちの良い所を発見したり、協力することの良さを感じたりすることができていた。これは、「希望（のぞみ）」の授業の説明の段階で、友だちと関わることで自分自身を成長させていこうという意識を繰り返し強調し、子どもたち自身がそのことを意識して活動してきたことも影響している。また、よりよい自分やカッコいい自分になりたいという意識の高まりもうかがえた。

「見つめる活動」では、「できる活動」の映像を見ながら客観的に自分自身を振り返る活動を行った。自分のめあてにそって4段階で自己評価を行い、どうすればよりよい自分に近づけるかを、小グループや全体で意見を出し合いながら考えた。

また、次の「できる活動」で自分が意識すべきことをより具体的に考えることができるように、行動目標「話すこと・聞くこと」に関するスキルトレーニングも授業の中に取り入れた。以下は、「見つめる活動」の子どもたちの反省である。

#### 自己評価2

私は、「できる活動」でケンカをしてしまいました。なぜ、ケンカになったかという、友だちが手を挙げていたのに当てなかったからです。また、役の決め方が悪かったから、ケンカになりました。

次の「できる活動」では、意見の理由を大切に、勝手に決めたりせず、話し合っていきたいです。また、うなずきながら目で聞いて、譲り合って話し合いを成功させたいと思います。

#### 自己評価4

私は4をつけました。理由は、この間のように書くことに集中して人の話を聞けなくなることもなかったし、相手の話をうなずきながら聞くことができていたからです。

次の「できる活動」でも、しっかりと相手の意見の理由を聞いて、それを大切にして意見をまとめていきたいです。そして、自分の役割をきちんとやって、よりよい活動にしていきたいです。



図3 はじめの一步「見つめる活動」の様子

このように、映像で見た自分の姿から自分の課題を明確にしていき、スキルトレーニングから得たヒントをもとに、具体的な目標を立てて取り組んでいく姿が見られた。また、「できる活動」の中で起こった争いごとを客観的に振り返り、相手の意見の理由を大切にするという次への一歩も自分たちで考えることができた。また、自分の役割を果たしたいという意欲もうかがえた。

このように、「できる活動」と「見つめる活動」を交互に仕組んできたことにより、振り返ったことを意識して活動できる場が確保され、その中で子どもたちは確実に成長を実感することができたと考えられる。一人ひとりが自分の課題を明確にし、その課題を乗り越えようとする姿が多く見られたことから、そのことが見て取れる。

第1単元のゴールである実習生に見せる本番では、多くの班が自分たちの思うような結果を得ることができなかった。以下は、本番後の子どもの感想である。

#### 自己評価2

声が小さく、しっかり手が伸ばせていなかったりして、練習の成果をほとんど出せなかった。また、相手に伝わる劇になっていなかった。

次の本番では、本気で練習して、練習から100%以上を出して、本番で100%出して「これが2年1組の本当の力だ」と6年生さんに見せられるように頑張ります。

#### 自己評価2

「絶対にできる」と思ってなかったからだめだったのだと思います。やはり気持ちが大切なんだと思いました。

6年生さんに見せる時は、大きな声と大きな動きを出し、盛り上がりがあって楽しくって笑顔が溢れる劇にしたいです。6年生さんに負けない劇を作って見せようと思います。

本番後の「見つめる活動」では、全員が次こそは絶対に成功させるといった内容のことを書いていた。今回の失敗により、子どもたちの意欲は逆に高まりを見せた。4つの行動目標に対する意識の高まりだけではなく、本気で練習することの大切さや、よりよいものをみんなで作っていききたいという向上心を持ち始めた子どもも見られた。本番後の実習生のアドバイスを真剣に聞く子どもの姿が印象的であった。

#### ②第2単元「自ら歩む」

実習期間終了後、再度自分たちが中間発表で行ったスイミーの劇を見るところからスタートした。その中で、どんな劇にするのか、どのように

作っていくのか、そして、「自分たちの成長した姿と感謝の気持ちを伝える」ことのできる劇を作るために具体的に何を頑張っていくのかを話し合った。その結果、劇「かさこじぞう」を、場面を分けてグループごとに作っていくこととなった。

第1単元ははじめの一步と同様に、「できる活動」と「見つめる活動」を交互に行いながら進めていった。以下は子ども反省である。

#### 自己評価2

「できる活動」では、6年生さんのためにと思いつながりながら練習すると、100%の力がでると思います。そして、当たり前のことを当たり前に行えるように自分からやることを探していきたいです。

じいさまやばあさまの優しさや温かさを表すことができるように頑張りたいです。

#### 自己評価3

声は出ていたけれど、セリフを間違えてしまったので、もっとセリフを覚えて、本格的な素敵な劇にしたいです。またセリフが早すぎて何を言っているのかが分かりづらかったので、はっきり普通に言うようにしたい。

もっと考えて、もっと気持ちが伝わるようにしたいです。



図4 自ら歩む「できる活動」の様子

第2単元での反省には、第1単元での反省との違いが見て取れた。それは、6年生に感謝の気持ちや成長を伝えるために劇自体をより良い作品にしていきたいという強い思いが出てきた点である。自分たちが楽しんで作っていた「できる活動」から、相手意識をもって完成度を高めることを目的とした「できる活動」へと変化していったのである。これは中間発表で、実習生に自分たちの成長が伝えられなかったことが、大きく影響している

と考えられる。「できる活動」の質の高まりを感じる事ができた。

また、第2単元では、第1単元とは異なる活動も設定した。それは、6年生から手紙を受け取る活動と6年生のオリジナル劇を観賞する活動である。以下は、鑑賞後の「見つめる活動」の中で出された意見である。

6年生の劇から学んだこと

- ・集中して最後まで全員でやりきること
- ・協力して早く準備をすること
- ・練習の時から努力していたこと
- ・みんなに伝える気持ちをもつこと
- ・自分たちが楽しそうに演じていたこと
- ・本気の姿は心に伝わってくる



どんな自分たちになりたいか

- ・全員で1つのことをやりきることができる
- ・真面目に楽しむことができる
- ・自分を成長させる自分
- ・6年生のようにきらきら輝く自分

6年生が真剣に行う姿から、多くの学びを手に入れることができた。この鑑賞の活動が、子どもたちに「自分たちの目指す姿」を明確に与えたことがうかがえる。

その後の活動では、これまで以上に真剣に取り組む姿が見られた。また、休憩時間に自主的に練習する子どもや劇に必要な小道具を自ら作ってくる子どもも見られた。

初めの頃とは大きく変化し、自主的に練習する中、本番の日を迎えることとなったのである。本番後の子どもの感想をまとめた。

- 本番を終えて自分の力を出し切り、その中で学ぶことがあった・・・・・・・・・・22名
  - 今回の本番に満足できていない。自分は今よりもっとできるようになりたい・・・・・・・・17名
- 以下は、子どもの反省である。

ぼくは、本番の時、6年生さんは楽しんでくれ

るかなと思いながら緊張していました。でも、劇が終わった後に、6年生さんが「おもしろかったよ。」と言ってくれたので、嬉しかったです。前回のスイミーの劇と比べると自分たちはすごく成長しました。練習を本気でやったからだと思います。本番はとても面白くてわくわくする、楽しいものなんだとぼくは思いました。

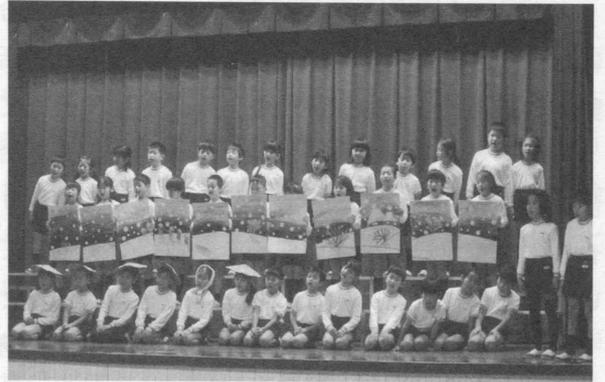


図5 自ら歩む「できる活動」の様子

本番後の感想では、6年生に声をかけてもらえて嬉しかったという内容が全員の感想に見られた。6年生に伝えるために努力してきたからこそ、6年生の一言が心に響いたと思われる。また、4月から行ってきた劇作りの中で、確かな自分の成長を感じている子どもが22名いた。残りの17名は、否定的な見方ではなく、「もっと自分ならできる」「よりよいものにしたい」という向上心が表れたものであった。より高い目標に向けて自分を高めていきたいと思える2年生になったのである。

#### 4 考察

単元「めざせ！カッコいい2年生」を通して、つけたい力とそれを支える価値観を育てることができたのか、2つの視点に沿って、学習の様子や事後アンケートから考察する。

##### (1) ナラティブ（物語論的）な自己開発活動について

4つの行動目標に沿った自己評価アンケートを単元の始め、第1単元後、第2単元後の3回取った。そして、それをレーダーチャートに表した。以下は、その変容である。

表3 4つの行動目標の平均

	4～3	3～2	2～1
第1回	0人	23人	16人
第2回	6人	26人	7人
第3回	22人	17人	0人

子どもたちは、レーダーチャートをもとに自分に、今、必要な力を判断し、その力を「できる活動」の目標にして取り組むことができた。そして、「見つめる活動」の中で映像を見ながら自分を冷静に振り返り、仲間と自分の思いや気づきを語り合うことで自己の変容に気づき、成長を実感していくことができた。すなわち、「できる活動」と「見つめる活動」を交互に行ってきた本単元の構成自体がナラティブであり、振り返りの中でよりよい自分になるための具体的な気づきを自分の言葉で書くことができていた。つまり、ナラティブな自己開発活動は、つけたい力やそれを支える価値観の育成に有効であると考えられる。

## (2) 学校内外のリソースを生かした「生き方」に関する体験活動について

本単元では、2つの人的リソースを活用している。1つ目は、教育実習生である。子どもたちが大好きな実習生の存在は、子どもたちの意欲や態度面に大きなプラスの影響を与えていたことが、事後の反省からうかがえた。また、実習生のアドバイスを受けて練習に取り組む中で、4つの行動目標に関する力や価値観だけではなく、集団として高まっていこうとする意欲やそのために一人ひとりが自分のやるべきことを果たすという、「希望（のぞみ）」を通して2年生で育てたい中心的価値観に関わる記述がみられるようになった。これは、教育実習生の存在が、つけたい力や価値観の育成に大きく影響を及ぼしたことを表している。

2つ目は、6年生である。前述の通り「6年生さんに自分たちの成長した姿と感謝の気持ちを伝えたい」という目標設定から、手紙の交換、オリジナル劇を見せ合う活動など、その全てが子どもたちにとって大きな意味のあるものだった。幼稚

園の年長から関わってきた6年生だからこそ、親しみと憧れを抱くことができ、そして、「自分も同じようにやってみたい」「自分もそうになりたい」という気持ちをもって、挑戦していくことができたと考えられる。目的意識や相手意識を明確にもって「希望（のぞみ）」の学習に取り組めたからこそ、つけたい力や価値観を身につけることができ、そして、「自分がなりたい自分」に近づくことができた。つまり、今回の2つの人的リソースは有効であったと考える。

## 5 おわりに

本研究では、第2学年の実践をもとに、新領域「希望（のぞみ）」の検証を行っていくことが目的であった。今回の実践を通して、4つの行動目標に対するプラスの意識の変化が見られた。それはすなわち、「希望（のぞみ）」の学習が「人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力」を育成することにつながったことを示している。

今後の課題として、今回の学習内容を次学年にどのようなにつなげていくかの検証が必要であると考えられる。次の学年とのつながりを意識した活動内容が設定できれば、子どもたちの力や価値観も、より積み重なって育成されていくと考える。研究2年目となる来年度に向けて、系統的な活動内容を模索していきたい。

### <引用文献・参考文献>

- 1) 本学校園の「希望（のぞみ）」の全体研究構想については、広島大学附属三原学校園『平成24年度第15回幼小中一貫教育研究会要項』、2012、pp.13-32を参照されたい。
- 2) つけたい力と価値観の表については、上掲研究会要項 p.21 表2を受けて作成している。
- 3) 全学年のものは、上掲研究会要項 p.21を参照されたい。
- 4) ナラティブ（物語論的）については、上掲研究会要項 p.24-25を参照されたい。